元レプリカがダンジョンにいるのは間違っているのだろうか

V1テイマー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

崩れ落ちるホドの中、レプリカとオリジナルは一つになり新たな陽だまりへと落ちていく。

そこには兎のような少年と紐の神様との出会いが待っていた。

ＴＯＡとダンまちのクロスです。

某動画でルークを見てたら書きたくなりました。

楽しんでいただけたら幸いです。

目　次

こんな出会いは間違っているだろうか ―― 1
そして僕らは集まった ―― 4
刻まれた過去 ―― 8
下準備 ―― 13

こんな出会いは間違っているだろうか

『僅かでも我が予言が覆されるとはな…驚嘆に値する』
耳から聞こえてくるのではなく、直接頭の中に送られてきたように響くローレライの声。
ルークはそれをどこか遠くから聞いているように感じた。
崩れ落ちるホドの中で交わした約束が頭から離れないのは、それがもう果たされる事はないと本能で感じ取ってしまっているからだろうか。
（何と無くだけど…分かる、俺とアッシュは）
一つになるのだ、と。
その結果ルークという人格がどうなるかまでは分からない。
ただ冷たくなったアッシュの体に熱が戻ると同時に自分の体から何かが抜けていくように感じる。
「なぁ、ティア…俺臆病だから言えなかったけどお前の事すげー好きだった…今までありがとう」
最早聞こえる事は無いと分かっているからか、最後に思い残す事を無くしたかったからか、ルークは自分を最後まで見ていると言ってくれた少女に対する思いを呟いた。
その声は涙まじりながらもとても穏やかだった。
その言葉を最後に意識を手放していく。
段々と2つの焔（ふたりのルーク）が溶け合い1つの焔となる中でその欠片が零れ落ちていった。
それらは本来消えるはずだった残り火、陽だまりに入りきらなかったはずだったもの。
しかし、ここに来てその欠片はまた新たな光を浴びる事になる。
それはローレライの意思か偶然か…

場所は変わってオラリオの街。
そこには肩を落としてトボトボ歩く1人の少年の姿があった。
「うぅ、また門前払いまさかギルドに入るのがこんなに大変だなんて…」
少年の名はベル・クラネル。
何れは英雄への道を歩き始める彼も、まだオラリオに来て日が浅く彼の女神にまだ出会う前である。
朝からいくつものギルドを訪ねたがどこにもいい返事を貰えず、日も暮れてきたしまい今日はもう諦めようかと歩いていた帰り道。
気落ちし下げていた頭をあげた彼の目に、紅々とした髪が特徴的な青年の姿が映る。
(綺麗な髪だなぁ、どこと無く気品も感じるし何処か有名なギルドの冒険者かな?)
僅かに羨望の眼差しで青年を見ていたベルだったが、視線を感じて振り返った青年と目が合うと慌てて頭を下げた。
「す、すいません!綺麗な髪だったからつい見惚れちゃって…」
(うわぁ!?僕男の人相手に何言っちゃってるんだ!)
心の中で咄嗟の自分の発言に自分でドン引きしたベルだったが青年は特に気にした様子もなく笑いかけた。
「そうか?ありがとな。良かったらお前も食うか?美味いぞ」
そう言ってベルに抱えたリンゴの1つを手渡す。
見知らぬ人から物をもらっていいものかと悩みながらも、目の前で果実特有の甘いにを放つリンゴの誘惑には勝てずおずおずと受け取る。
歳は恐らく自分より上なのだろうがその笑顔はまるで幼さの残る少年のようだとベルは思った。
青年が一口リンゴを齧ると自分も同じように一口齧る。
「中々いけるたろ?」
「はい!」
甘酸っぱく程良い硬さのリンゴをしゃりしゃりと咀嚼しながら2人して笑いあう。

この街に来て久々に人の優しさに触れた気がしたベルはこの空間に心地よさを感じていた。
しかし、それは突如としてかけられた怒声により崩れる事となる。
「見つけたぞ！赤毛のあんちゃん！」
突然の大声に驚いたベルがリンゴを喉に詰まらせかけながら声のした方を向くと、そこには顔を真っ赤にした男が立っていた。
「店の前から堂々とリンゴを掻っ払っていくたぁいい度胸じゃねぇか！」
状況が飲み込めず青年と男を交互に見るベルをよそに青年は男へと怒鳴り返す。
「置いてあった物を拾っただけだろ！人聞きの悪い事言うんじゃねぇよ！」
「あれは店の売りもんなんだよ！」
（うぇぇぇぇぇぇ!?）
２人の会話から青年が会計を料金を、支払わずにリンゴを持っていった事を知り心の中で絶叫をあげる。
これが兎と焔の最初の出会いであった。

そして僕らは集まった

「悪りぃベル…なんか迷惑かけちまったな」
バツの悪そうな顔をして頭をポリポリとかきながら青年はベルに頭を下げる。
それに対しベルはぶんぶんと首を横に振り、青年に向かって笑いかけた。
「そんな！気にし無いでください。それに結局力になってくれたのは神様ですから」
そう言って横に動かした視線の先には、小さな身長に反比例した胸を張りどやぁと得意げに笑顔を浮かべる少女の姿があった。
「ふふん！当然さ。なんせ未来の子供達を守るのは僕の役目だからね！」
目の前にいる少女が自分は神だと名乗り出た時はまさか、と思ったがこうしてみるも不思議と納得できる気もする。
青年は未だに少女が神様だとは信じきれてい無いらしく半信半疑の目を向けているが。
この３人が集まるきっかけとなったほんの少し前の出来事をベルは思い返した。

「さぁあんちゃん、一体どういうつもりでウチのリンゴを持って行ったのか説明してもらおうか。身なりからするとリンゴを買う金のねぇ
貧乏冒険者でもあるめぇよ。どこのファミリアのぼっちゃんなんだ？」
今にも掴みかかりそうだった所をベルがなだめたおかげか、幾分かの冷静さを取り戻した男。
この人はオラリオの街で出店の果実屋の店主をやっていて、今日もダンジョン帰りの冒険者にリンゴを売っていたのだという。
２人から話を聞くと、どうやら青年が代金を支払わずにリンゴ持って行ったのは事実のようだ。

しかし、ベルの目には青年が悪事を働くような人間には見えず何かの間違いでは無いか、という思いが捨てきれずにいた。
そんなベルの視線を受けていた青年はため息をつくとそっぽを向いたまま答える。
「名前はルーク、ルークフォンファブレ…それ以外は覚えてない」
青年ーールークはぶっきら棒にしかし、どこか寂しそうな顔で遠くを見つめた。
それを聞いたベルは驚きに目を開き、店主は疑いの眼差しをむける。
「おいおい、あんちゃん。嘘つくにしてももう少しまとも嘘をついたらどうだ？」
「嘘じゃねーよ！気づいたらこの街にいて名前以外何にも思い出せねーし、どこ行ったらいいかもわかんねぇしおまけに腹は減るし…そしたら美味そうな匂いのするもんが沢山置いてあったから少しくらいもらってもいいだろって思ったんだよ！」
普通に考えれば突拍子のない話であり到底信じられるものでは無い。
しかし、ルークの声にはどこか鬼気迫るものがありそれを逃げるための言い訳だと言うのはベルにも店主にも憚られた。
「し、しかしなぁあんちゃん…こっちも商売でやってんだ。丸っと嘘ついてる、とは言わ無いが商品を盗んだのも事実だしよぉ」
「で、でしたらリンゴの代金は僕が払います！知らなかったとはいえ僕もリンゴ食べちゃいましたし」
頭を抱える店主に対しベルはルークを庇うようにして店主の前に出る。
元々の優しさに加えこの街にきて久しぶり優しくしてくれたこと、ルークの寂し気な表情、そして何より自分と同じで彼も1人ぼっちなのかもしれないという思いがベルを動かしていた。
「お前…」
ルークは心の底から驚いたというように目を開きベルを見つめる。
「うーん…まぁ代金を貰えるなら支払いは誰でも構わないが、君はど

このファミリア所属なんだ？身元を証明できる物はあるのか？」
「え!?えーと…僕はまだ未所属の冒険者で家族とかもいなくて、そのぅ…」
「いや、もう今更俺自体は赤毛のあんちゃんが嘘ついてるとも思えないけどよ？こっちも冒険者相手に商売してるから分かるんだが、中には情に訴えかけて犯行を繰り返す奴もいてだな…だからせめて所属のファミリアくらいは抑えとかないと周りにも示しがつかねぇんよ」
なるほど、と思うと同時にしまったとベルは感じた。
ルークを助けようと思っての行動だったがルークが仮に助かっても、店主を困らせる結果になってしまいそうだ。
今までの会話からこの店主が良い人であるのは分かってきた、だからこそこの人は最終的にルークもベルも許して自分が泥をかぶってしまうだろう。
仕方ないとばかりにため息をついた店主が口を開こうとした瞬間1人の少女がその場に躍り出た。
「やぁやぁ！話は聞かせて貰ったよ？そこの赤髪君は嘘をついてない、この神が保証しよう！店主くんも白髪君も中々人を見る目があるね」
やたらと高いテンションで歩み寄ってきた少女は近くまで来ると腰に手を当て胸を張る。
「ヘスティア様、なんでここに？というかいつから聞いてたんですかって最初から？…はぁ…まぁ神様にゃ嘘はつけねーていうからこのあんちゃんやっぱ記憶ないのか」
どうやら店主とは知り合いの人物、いや神様のようで1人納得していく。
それに頷いた神、ヘスティアは続けざまに口をひらいた。
「どうだろう？そこの2人を僕のファミリアに入れるというのは！今回の件はそれで丸く収まると思うけどね」
「うぇぇぇぇ!?」
本日二度目となる絶叫をあげるベル。
しかし、今回は驚きに加え喜びの感情もあった。

ついに自らのファミリアが見つかったかもしれないのだ。
「え!?ヘスティア様のとこにですか?い、いやそれは…」
「…なんだい店主君。僕のファミリアじゃ何か問題でもあるのかな?」
笑顔ながらもどこか威圧を感じさせるヘスティアに詰め寄られ押し黙る店主。
ヘスティアはくるり、とベル達の方に振り向いた。
「と言うわけでどうだい?君達、僕のファミリアに入らないか」
そう言って手を差し伸べて来る女神の手を握ろうとして止める、隣にいるルークはどうするのだろうか、自分にとっては好都合だがルークがどうしたいのかは分からない。
ルークはまだ状況を飲み込めず惚けているようだったがベルと視線が合うと自らもおずおずと手を伸ばす。
「俺、正直ファミリアとか冒険者とかよく分かんねーけど…そのファミリアに入ることで助けてもらった恩を返せるならそうする」
そう言ってベルと同時にヘスティアの手を掴んだ。

刻まれた過去

数奇な縁から同じファミリアに組することとなったルークとベル。
互いに自己紹介を済ませた２人はヘスティアと共に本拠地となるホームへと向かっている。
「ダンジョンにモンスターか…なんかワクワクするな！」
道中でヘスティアからひと通りダンジョンやファミリアについての説明を受けたルークは目を輝かせていた。
出来るのならば今すぐにでも冒険に出てしまいそうな勢いの彼をヘスティアは笑いながら宥める。
「やる気があるのは良いことだよ。まぁ今日はもう日が暮れちゃってるしギルドの手続きとか、ステータスの事とか色々あるから早くても明日までは我慢して貰うけどね」
暫くそうした談笑を続けながら歩いた一行はうらぶれた教会へとたどり着いた。
その教会は何年も手入れがされていないのか、所々屋根や壁に穴が空いており隙間から草木が生い茂っている。
イメージしていたホームというものとの差に少し面食らうベルだったが少しだけ秘密基地みたいで格好良いとも思った。
一方のルークは容赦なく「ボロい」と口にしヘスティアへ僅かにダメージを与えていた。
「ま、まぁ多少見てくれは悪いが今日からここが君達の家だ！遠慮なく寛いでくれたまえよ」
「いや、多少っーか廃墟だろこれ」
又しても飛んできたルークの素直な言葉が刺さったのか、ぐさっという音が聞こえてきそうなほどよろめくヘスティア。
その場にうずくまりのの字を書き始めた彼女を見てられなくなったベルは、先ほど思った感想を照れながらも素直に述べた。
「た、確かにすこし歴史を感じますけど、何だか秘密基地って感じがして格好よくて僕は好きですよ？神様」

「うぅ…ベル君は優しいなぁ！ルーク君も少しは見習ったらどうだい」
慰めてくれたベルに飛びつき涙目で子犬のように唸る。
それに対しルークは手をひらひらとふり受け流した。
年の離れた兄妹のようなやり取り微笑ましい気持ちになったベルは思わずニヤやけてしまう。
と、そこでくっーと可愛らしい音が近くから聞こえてきた。
あたりを見回したが元々裏通りで人がいない事もあり自分達以外に人影は見当たらない。
するとベルはヘスティアが僅かに顔を赤くしてるのに気がついた。
「とりあえずお腹も空きましたし何か食べませんか？」
察してくれたベルの提案にヘスティアは無言で頷くのだった。

教会の中も外観のとおり中々くたびれた感じではあったが、意外と使える物もありそれなりに家としての機能はありそうだった。
帰り道で購入したパンやお肉などを食べてお腹を満たした3人はそれぞれ輪を囲むようにして座っていた。
「さて、そろそろ君たちにボクの恩恵を刻もうじゃないか」
それを聞いたルークは待ってましたとばかりに勢いよく立ち上がる。
少しでも早く冒険者になってダンジョンに潜りたかった彼は早く早くとヘスティアを急かす。
そして、それはベルも同じようで期待を抑えられずソワソワしていた。
「ふふん！まぁ待ちたまえよ君達。恩恵を授けるならやっぱり相応しい場所じゃないと」
そんな2人の反応に気を良くしたヘスティアは得意げな顔をしながらホームを出るよう指示する。

中々に口の悪いルークではあるがこの時は楽しみのあまり素直に従っていた。
そうして暫く歩くとみすぼらしい本屋へとたどり着く。
「着いたよ。ここでボク達のファミリアは始まりを迎えるんだ！」
かなりの本好きである彼女は初めての場所はココだと決めていたらしい。
中に入ると高齢の男性が座っておりヘスティアと2、3回言葉を交わすと2階へ通してくれた。
そこは四方を本と本棚で囲まれており古い木の匂いが部屋いっぱいに広がっていた。
「さぁ2人とも上着を脱いで座ってくれ」
神様とはいえ自分とそう年の離れていないように見える女子の前で肌を晒すのは僅かに恥ずかしいものもあったが、いよいよ恩恵を受けれるという高揚感の方が勝っていた。
ベルはさっと上着を脱ぐとヘスティアの前に腰を下ろす。
一方のルークは何だか上着を脱ぐのに手間取っているようだった。
「よし！まずはベル君からいこうじゃないか！」
うきうきとしながらベルの背中に神の恩恵を刻む。
途中でベルが冒険者になりたいと思った理由や彼の祖父の話を聞いているうちに刻印が終わる。
幾つも並ぶ漆黒の文字そっとなぞりまるで母親のような優しい表情を浮かべるヘスティアは、これからベルがどんな物語を刻むのか楽しみに思い、またその物語が彼にとって満足のいくものであることを願った。
「さぁ次はルーク君の番だぜ！」
くるりと振り返った彼女は思わず息をのむ。
上着を脱ぎ終え肌晒した彼の上体には剣で刺されたような傷が幾つか刻まれていた。
「・・・そ、それどうしたんですか!?」
ヘスティアに次いで振り返ったベルも驚きと心配の混じった声で傷跡を指差しながら尋ねる。

「ああ、これか？よく分かんねーけど昔怪我したとかじゃねぇの？それより俺にも早く恩恵を刻んでくれよ！」
元々記憶のない彼にとっては大した事でもないのか早く刻印を刻んでくれとせがむ。
そんなルークの態度に呆気にとられながらもヘスティアは刻印を刻み始めた。
まだ年相応だったベルの体に対し、ルークの体は幾多もの戦闘を潜り抜けた戦士のように感じる。
そんな彼の体を見てヘスティアはある予感を立てた。
（ま、まさかルーク君は…）
そして刻み終えた神聖文字を読み自らの予想が正しかったと思う。
ヘスティアはぐぬぬと悔しそうに顔を歪める。
「どうかしたんですか神様？ルークさんのステイタスに何か問題が？」
「えっ!?ど、どういう事だよ！」
彼女は自分の反応を見て不安そうな声を上げた２人に対し慌てて首を横に降る。
「い、いや違うんだ。別に悪い事ではないというか、むしろルーク君的には記憶の手掛かりになるかもしれないし悪い事じゃないんだけど…マサカボクガミツケタトオモッタコドモニ、スデニオテツキガイタトハ…」
後半は早口過ぎてよく聞き取れなかったが少なくとも悪い事ではないと言われ安堵する２人。
ただ、やはりヘスティアのちょっとした嫉妬心はぬぐえ切れていなかった。
（体の傷を見た時にまさかとは思ったけど…ルーク君か以前どこかで冒険者をやっていたとは…ぐぬぬ！子供の初めてを奪われた親の気持ちってこういうものなのか！）
どこかずれた感想を抱きながら再びルークの背中をなぞる。
そこには真新しくステイタスが刻まれていた。
ルーク・フォン・ファブレ

Ｌｖ，３
基本アビリティ
力：Ａ８８０
耐久：Ａ８５０
器用：Ａ８００
敏捷：Ａ８３０
魔力：Ａ８００
＜＜魔法＞＞
【アイシクルレイン】
＜＜スキル＞＞
【限界突破】
【忘却欠如】

下準備

「お待たせしましたヘスティア様。データを調べてきましたがルーク・フォン・ファブレという名前の冒険者の記録は無いようです…お力になれずすみません」

申し訳なさそうに頭を下げるギルドの受付嬢に軽く手を振り構わないと告げるヘスティア。

刻印を終えた翌日、彼女はギルドに赴きルークの冒険者としての記録が残っていないかを尋ねに来たのだが、少なくともオラリオの街に公式として彼の記録は残っていなかった。

(可能性としてはルーク君を秘蔵っ子として育ててたファミリアがある、ていうのも無くは無いけど…彼のＬｅｖｅｌが3なのを考えると無理があるかな?だいたいそんなアウトかセーフか分かんない事する意味も無いだろうし)

たしかに他のファミリアやギルドにＬｅｖｅｌを誤魔化すファミリアがいるという話は聞いた事がある。

しかし、いくらなんでも人1人をこっそり育てるというのはリスクの方が高いし、それに見合うリターンがあるとも思えない。

(やっぱりオラリオ以外の街からやって来た冒険者、と考えるのが一番妥当だね。幸い…と言っていいのかは微妙だけどボクの恩恵を受けれた、という事はルーク君は既に前の主神との関係が切れている)

オラリオには所属するファミリアから別のファミリアに移る改宗というものが存在する。

それには元のファミリアの主神から許可が降りなければならない。

つまり、ヘスティアのファミリアに入ることの出来たルークは少なくとも脱退あるいは所属ファミリアが解散していたのだろう。

もっともあくまでオラリオのファミリアでの話であり、都市外のファミリアがどうなのかは分からないが。

(まぁ、考えてても仕方ないし今更ルーク君を手放す気もないし何かあったらその時に考えればいいか)

ヘスティアはこれ以上の思考は無意味だと思いギルドを後にした。

「はぁ!?ダンジョンに潜れねぇてどういう事だよ！」
ホームに帰ってきたヘスティアに対しルークは辺り一帯に響くほどの大声を出して詰め寄る。
「うぉう…耳がきーんてなった…お、落ち着いて聞いてくれルーク君、君は既にＬｖ３だ。本来なら１人でも１０階層くらい何てことは無いだろうさ、でも今は記憶がない」
不満顔で彼女を軽く睨みつけるようにしていたルークだったが真正面から真剣な顔で見つめ返されうっ、と顔をそらす。
彼にも意地悪で言っているのではなく、本気で心配しているからこその言葉だと伝わったからだ。
「記憶を取り戻すまで、とは言わない。でも最低限ダンジョンに必要な知識を身につけるまでは我慢してほしいんだ」
ルークを見つめるその目は、新しく出来た家族を失う事を恐れた不安の色を覗かせていた。
隣にいるベルも口には出さないが、同じようにしてルークを見つめている。
「だっー!!分かったからそんな目でみるんじゃねぇよ、うっぜぇての！」
照れ隠しに毒を吐きながら2人に背を向けたルーク。
その顔はほんのり赤く染まっていた。

こうしてルークのダンジョン勉強会は始まったわけだが意外にも勉強会はスムーズに進んだ。
冒険者やダンジョンの事と並行して世間の一般常識、この世界の通貨であるヴァリスの事なども教えていたのだが1週間程でルークは覚えてしまった。
「こう言ったら失礼だけど、ルーク君はもっと勉強に対して消極的な

方かと思ったよ」
「いつまでもダンジョンに入れないのは嫌だからな、好きじゃねーけど我慢してんだよ」
頬杖をつきながらすらすらと左手でノートに文字を書いていく。
「そう言えばルーク君、最初は文字を右手で書いたり左手で書いたり安定してなかったね」
「なんかどっちで書いても違和感があったんだよな。今は左手で書くのがしっくりくるけど」
一度手を止めルークは自分の両手を見つめた。
勉強会が始まった頃、というよりもオラリオで意識を取り戻した時からずっと自分の体に違和感は感じていたのだ。
最近になってようやく日常の動作や稽古として剣を振るう分には問題無い程度まで治ってきているが。
「記憶が無い事と関係しているのかもね。元々両利きだったりするのかな？」
「知らねーよ、それよか課題終わったぞ」
そう言ってノートを差し出した相手はヘスティア…ではなく耳の長いハーフエルフの女性、ギルドの受付嬢であるエイナだった。
彼女はベルを担当するアドバイザーであり、同時にルークを担当する予定でもある。
そのため昼間などヘスティアがバイトでルークに教える事の出来ない時間帯は彼女が勉強を見てくれていた。
元々、昼はルーク1人で勉強する予定だったのだが本屋の勝手がわからず右往左往していた彼を、たまたまエイナが見かけたのがきっかけである。
「本当に？…ふむふむ、問題ないねよく出来てるよ。これがダンジョンに潜りたいていう一念だとすると凄いね」
ただそれだけでは無いと思うけど、と彼女は心の中で呟いた。
ルークが早くダンジョンに潜りたいというのは本当だろう、しかしその理由は自分がモンスターと戦いたいからだけではなく、先に1人でダンジョンに潜っているベルの事が心配だからだとも感じている。

口に出せば彼は否定するだろうがベルがボロボロになって帰ってきた日の翌日は、驚くほど集中して勉学に取り組んでいたのをエイナは覚えている。
(態度や口は悪くて子供ぽいところもあるけど、根は優しいんだろうなぁこの子)
ルークを慈愛のこもった瞳で見つめるエイナ。
常からあまりダンジョンで危険な相手と戦って欲しく無いと考える彼女だったが、今回だけは早く2人揃ってダンジョンに潜れる日が来る事を願っていた。

ギルドからの帰り道、頭を使った影響かかなりの空腹に襲われていた。
しかし、彼に渡されるお小遣いは決して多く無い。
ヘスティアファミリアは構成員がルークとベルの2人であり、現状の収入がベルのダンジョンで得た魔石などを換金したものとヘスティアのバイトで稼いだ分しか無いのだから仕方ないのだが。
(晩飯まではまだ少し時間あるし、どっかで何か買うにしても金がねーんだよな…)
はぁ、とため息をつきながら歩くルーク。
しばらくふらふらとしていた彼に肉を焼いた香ばしい、いい匂いが流れてきた。
思わず足を止めてしまい匂いの元をたどる。
キョロキョロと辺りを見回し歩いて行くと、そこには『豊饒の女主人』と書かれた看板のたった大きな酒場があった。
オラリオでも1、2を争うであろう規模の酒場に暫し圧巻に取られていたルークへキャットピープルの少女が近づく。
「ミャー達のお店に興味があるのニャ?なら食べていくといいニャ!後悔はさせ無いニャよ!」
どうやらその少女はこの店の店員のようで、ルークを店に誘おうと

彼の腕を掴み店へ引き摺り込もうとする。
以前のリンゴの件により無銭飲食に対して軽いトラウマを覚えた彼は力の限りそれに抵抗した。
「だぁっー!?離せ!俺はただ腹減ってたから見てただけだっつーの!別にこの店に興味があったわけじゃねぇ!」
「お腹が空いてるなら尚更ウチで食べていくといいニャ!」
見た目以上に店員の力が強く中々腕を引き離すことができ無い。
そうして、暫くの間店の前で続いた攻防が続く。
その周りには何事かと人が集まり始めていた。
「このっ、いい加減話しやがれ!俺は金がねーんだよ!」
「ここに来て往生際の悪いことというんじゃニャい!いいから大人しくミャー達のために貢ぐニャ!」
「話聞いてんのか!その金が無いって言ってんだろ!」
だんだんと注目を浴びることに焦りを感じたルークだったが、キャットピープルの少女が手を離す様子は一向にない。
このまま延々とこれを続けるのかとウンザリしてきた矢先、彼女の頭を何者かがスパンと叩いた。
それによりニャッ!?という叫び声と共に手が離れた事でルークは解放される。
「アーニャ、前にも店の前で騒ぎを起こさ無いようにと注意したはずですが?」
そう言ってアーニャと呼ばれた少女の頭の上から給仕用のお盆を脇に抱えなおし、ルークへと正対したのはエルフの女性だった。
「すみませんお客様。どうやらウチの店員がご迷惑をおかけしたようで」
彼女の声はあまり抑揚の無いものではあったが申し訳なさが滲み出ている。
もっとも、今のルークは長い事続いた攻防の結果増した空腹と街行く人々から注目される羞恥によりかなりの疲労に襲われていたので話を聞く余裕が無かった。
「あぁ…もう、何でもいいから俺は帰るぞ」

ちょっとした好奇心から酷い目にあったと思いながらホームへと向かって歩き始める。
流石にこの騒ぎの後でどこかに寄ろうとは思えない。
背後でエルフの女性が何か言っているようだが一刻も早く家に帰りたかったルークは適当に手を振り帰路へと着くのだった。

「死にかけたって割には嬉しそうじゃねーのベル、そんなにアイズとかいう奴の事が気に入ったのか？」
その夜、ホームへといつもより早く帰ってきた少年が、死にかけたと言っていた割にウキウキとしていたので思わず声をかけたルーク。
ヘスティアと共にだいたいの経緯は聞いていたが、ベルの様子があまりにもおかしかったため尋ねずにはいられなかった。
するとベルは、顔をほんのり赤く染めながらダンジョンでミノタウロスに殺されかけたところを救ってくれた美少女に心を奪われたのだ、と照れながら詳しく話してくれた、２時間程。
「という事でやっぱり僕がダンジョンに出会い求めたのは間違ってなかったんですよ！」
力説してくれたベルには悪いが猫娘との出来事で体力を使い、疲れていたルークの頭にはほとんど話の内容が入っていなかった。
ルークはまさかここまで長話になるとは、と呆れながらもベルの幸せそうな顔を見るのは嫌いじゃ無いと思いながら微睡む。
やがて喋り疲れて寝てしまったベルの寝息を聞くと彼もまた夢の世界へと旅立っていった。